特集 胸部疾患の画像診断法－モダリティーの比較－

Diagnostic Imaging of the Pediatric Thoracic Diseases －Intermodality Comparison－

特集を企画するにあたって

川﨑一輝
国立成育医療センター呼吸器科

Kazuteru Kawasaki
Division of Respiratory Medicine, National Center for Child Health and Development

胸部疾患の画像診断法といえば，誰もがまず胸部単純X線撮影を思いつくことでしょう．小生が小児呼吸器科医に成り立ての頃は，単純X線写真だけを何枚も何枚も読影しながら，その中から正常所見あるいは軽度の異常所見と，さらにCTなどの精査が必要な異常所見とを見分けることの重要性を繰り返し教えられました．そして，精査で得られた所見から，逆に単純X線写真を振り返り，以後の読影に役立たせるようにも指導を受けました．したがって，たとえば胸部CTひとつを行う場合でも，自分なりの明確な目的やこだわりを持つ必要があると考えています．

最近は，単純X線撮影以外のさまざまな画像診断法（CT，MRI，RIなど）が，多くの医療機関で比較的容易に行えるようになりました．しかもそれらの画像の精度は，目覚ましい勢いで改善されつつあります．それはそれで大変有益なことであり，小生もその恩恵を大いに被っています．

その反面，明確な目的を持たないCTやMRI検査をしばしば目にするようになりました．縦隔病変では，いつもCTとMRIの両方の検査が必要なのか悩まされます．甚だしい例では，肺野病変に対してCT，MRI，RIを行い，さらに血管造影まで行って何も結論が得られずに紹介される症例も見かけるようになりました．

そこで，画像診断法の原点に立ち返る意味も込めまして，今回の特集を企画しました．すなわち，臨床症状，聴診所見，胸部単純X線写真から，主病巣が気道，肺野（肺実質），縦隔のいずれであるかを大まかに鑑別した後に，次にどの画像診断法（モダリティー）を優先して行うべきかを，専門医の方々に推薦していただこうという企画です．

ここでは小生の独断で，あらかじめ各分野ごとに二つのモダリティーを挙げ，それぞれの優劣を述べていただく対決のような形態を取らせていただきました．すなわち，気道病変を疑う場合には，CTと気管支鏡を比較してどちらがより有用であるかを，CT側からと気管支鏡側からそれぞれに，また同様に肺野病変ではCTとRI，縦隔病変ではCTとMRIを比較して論じていただきました．といっても，必ず両者の優劣をつけるというのが最終目標ではなく，時には両者とも不可欠とする結論であっても良いはずです．本特集の最終目標は，二つのモダリティーを比較して論ずることで，それぞれの主目的を再確認することと考えています．

執筆者の方々には，大変難しいテーマにも拘わらず，読みごたえのあるわかりやすい内容にしていただき，心より感謝致しております．本特集がモダリティーの再認識につながり，胸部疾患の診断において，より的確なモダリティーの選択の助けになれば幸いに存じます．